



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	トゥハチーフスキー事件に関する一試論 (20周年記念号)
Author(s)	平井, 友義; Hirai, Tomoyoshi
Citation	スラヴ研究, 20, 81-95
Issue Date	1975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5051
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113013.pdf



トゥハチェーフスキー事件に関する一試論

平 井 友 義

は し が き

1. 証拠の「偽造」をめぐる
2. 粛清の背景—軍事的効率と政治的忠誠
3. むすびに代えて

は し が き

1937年6月10日、ソ連政府は突如、前国防人民委員代理兼戦備局長トゥハチェーフスキー (Тухачевский, М. Н.) 元帥をはじめ、赤軍最高首脳部八将星の逮捕と軍規違反、反逆罪、外国勢力との通謀、ソヴェト人民に対する背信罪、労農赤軍に対する背信罪の容疑による告発を発表した¹⁾。翌11日、最高裁判所特別法廷は秘密審理でこれら八将官全員の有罪を決定し、即日銃殺刑が執行された²⁾。被処刑者に「反革命秘密スパイ団」の罪状を負わせる軍命令は、次のスローガンでしめくくられていた。「ファシスト裏切者打倒！スパイと変節者に死を！わが光栄ある労農赤軍万歳！わが偉大なるレーニン＝スターリンの党万歳！」³⁾

この血腥い報道は文字通り世界を驚倒させた。たしかに、1934年12月、スターリンに次ぐ党内ナンバー・ツウの地位を占め、声望ではむしろスターリンを凌駕していたといわれるキーロフ (Киров, С. М.) がレニングラードで暗殺されて以来、党内反対派に対する仮借なき弾圧が進められ、また二度にわたる「粛清裁判」(1936年8月『トロツキー・ジノーヴィエフ派テロリスト合同本部事件』、37年1月『反ソ・トロツキスト並行本部事件』) が象徴するように錚々たるオールド・ボルシェヴィキが「人民の敵」の汚名のもとに、大々的に抹殺されつつあったことは周知の事実であった。しかし、赤軍はスターリンによって強行された工業化と集団化の急進路線のおそらくは最大の受益者であり、またその故に、「第二革命」の激動にさいしても相対的にはゆるぎなくスターリンの背後にまともまっているものとみなされてきた。

したがって、今次の粛清の照準がまさしく赤軍の精華に向けられ、しかも日本、ナチス・ドイツの軍事的脅威がソ連の上に無気味にのしかかっているまさにその時期に、粛軍の火蓋が切って落されたことは、さまざまな憶測と懷疑を生まないではいかなかった。

- 1) «Правда» 11. VI, 1937. 他の7人はヤキール (Якир, И. Э.) (ウクライナ軍管区司令官), ウボレーヴィチ (Уборевич, И. П.) (白ロシア軍管区司令官), コルク (Корк, А. И.) (前モスクワ軍管区司令官, フルンゼ名称軍事大学校長), エイジエマーン (Эйдемман, Р. П.) (国防航空化学協会議長), フェリドマーン (Фельдман, Б. М.) (赤軍総務部長), プリマコーフ (Примаков, В. М.) (レニングラード軍管区司令官代理), プートナ (Путна, В. К.) (前在英大使館付武官) である。なお6月1日には、ガマルニク (Гамарник, Я. В.) (赤軍政治本部長) が逮捕に先立ち (5月31日) 自殺したことが発表されていた。(«Правда», 1. VI, 1937)
- 2) «Правда», 12. VI, 1937.
- 3) ヴオロシーロフ (Ворошилов, К. Е.) 国防人民委員命令第97号 («Правда» 13. VI, 1937).

果してトゥハチェーフスキー以下の将星の間に、当時のソ連側発表にあるように、ドイツとの通謀、さらには軍事的クーデタに似た計画があったのであろうか。この疑問は、犠牲者の「名誉回復」がなされている今日、深く立ち入って吟味する必要はないともいえるが⁴⁾、もし将軍達の罪状なるものがスターリンと内務人民委員部 (НКВД) のデッチ上げにすぎなかったとしたら、スターリンの真の狙いは何処に求めらるべきであろうか。本稿はこのような問題意識に立って、今なお多くの謎に包まれた事件の歴史的背景を解明する手がかりを見出すための一つの試みである。

1. 証拠の「偽造」をめぐって

スターリンによる赤軍将官の断罪の背景と動機については、すでに1939年、粛清の危険を身を感じてアメリカに逃れた赤軍参謀本部情報部員の手になる「内幕物」が公表されていた⁵⁾。著者クリヴィツキーによれば、36年末から翌年春にかけて、独ソ間の諒解をめざす秘密交渉がかなりの進展をみせており、ヒトラーとの協定の近きことを確信したスターリンは、対独接近に対して抵抗必至と予想される赤軍上層部の粛清を決意し、そのためにナチス秘密情報機関を通じてトゥハチェーフスキーらを罠にかけるべく、彼らの「反ソ陰謀」の証拠を逆輸入したとされている。

この見方は、ソ連亡命者のこの種の手記の信憑性に関する一般的不信と、同書にみられる独ソ不可侵条約の論理の安易な遡及的適用に対する疑念から、戦後になってからもわが国では、一部を除いてあまり考慮の対象となることがなかった。ところが1961年10月、ソ連共産党第22回大会の席上、フルシチョフがスターリン批判に関連して、トゥハチェーフスキー事件におけるヒトラーの「情報機関」の挑発の存在を示唆し⁶⁾、その後ソ連国内でも同趣旨の解釈に立脚する論策がいくつかが現われることによって、クリヴィツキー説もいちがいには片付けられなくなった。

たとえばネクリッチ (Некрич, А. М.) の著作 (1941, 22 июня, Москва, 1955)⁷⁾ は、独ソ戦前史に関するソ連で出版された研究としては比較的宣伝臭のない客観的研究に属するが、このなかでは、ドイツの情報・防諜機関の内部でひそかに赤軍統帥部を破滅させるための証拠書類が偽造された、とのドイツ側関係者の証言が紹介されている⁸⁾ (もっともネクリッチ自身は、同書を出版した後、党イデオログからの激しい批判にさらされ、1967年7月には党から除名されたといわれている。この点については後出)。

4) この「名誉回復」については、有名なフルシチョフ (Хрущев, Н. С.) 秘密演説のなかでも暗示されていたが (演説の邦訳は、『十月革命の40周年』, 日月社, 昭和33年, 49-141ページ), 1961年10月27日, 第22回党大会の席上, フルシチョフによって公然と確認された。(См. XXII Съезд Коммунистической Партии Советского Союза (стенографический отчет), т. II, М., 1962, стр. 586)

5) W. G. Krivitsky, In Stalin's Secret Service, N. Y., 1939.

6) XII Съезд ..., т. II, стр. 585-86. なお同大会での陸海軍政治本部長ゴリコフ (Голиков, Ф. И.) の発言は、スターリンによる党・国家の幹部に対する「迫害と専横」を非難しただけで、より多くをジュエコフ (Жуков, Г. К.) 前国防相の「ボナパルティズム」批判に割いているのは対照的である。(XII Съезд ..., т. III, стр. 66-67)

7) 筆者の利用したのは、1968年に出版された本書の英訳版である。V. Petrov, "June 22, 1941", Soviet Historians and German Invasion, Columbia, 1968.

8) Ibid., pp. 132-34.

そこでまず、筆者が披見しえた限りでの資料をもとに、ドイツ秘密情報機関と HKBД の「合作」状況を再構成してみたい。この資料としては、クリヴィツキーの前掲書のほか、ネクリッチもふれている W. ハーゲン（本名 Wilhelm Hoettel）、シェレンベルク（Schellenberg, W.）の手記⁹⁾である。ヘッテルは、1937年9月に「国家公安警察」（「公安警察」とゲシュタポ）と SS（親衛隊）の情報・防諜機関であった「保安部」（SD）との統合の結果新設された「国家公安本部」の第二代長官カルテンブルンナー（Kartennbrunner, E.）の副官であり、シェレンベルクは、1933年以来、ハイドリッヒ（Heidrich, R.）の統轄する SD のメンバーであり、ハイドリッヒが「国家公安本部」初代長官になると、その下で第 VI 課（対外諜報）課長を勤め、戦争末期には、「国防軍防諜部」（Abwehr）の廃止とともに軍事情報機関の総括責任者となった人物である。

いうまでもなく、証拠「偽造」の問題とこの「証拠」がトゥハチェーフスキーらの処刑で果たした役割の問題とは、もともと別個のカテゴリーのものであり、これらが無媒介的につないでいるクリヴィツキーらの見方は、当然に批判的検討の対象とされなければならない。

1935年にハイドリッヒはソ連に対する諜報活動を組織し、ドイツ国内および国外のロシア人亡命者から情報の蒐集に努めていたが、そのうちパリ在住の元白衛軍大将スコブリン（Skoblin, N.）と接触をつけることに成功した¹⁰⁾。ハイドリッヒは36年終り頃、スコブリンからトゥハチェーフスキーによる軍事クーデタ計画なるものを聞き出し、クリスマスの直前、ヒトラー、SS 長官ヒムラー、ハイドリッヒの三者の間で、このソ連の内部対立を如何に利用すべきかが検討された¹¹⁾。そのさい、トゥハチェーフスキーらを支持してボルシェヴィズムの脅威を一挙に除去するか、それともスターリンに賭けて、赤軍最高幹部を屠りさり、ソ連軍事力の弱体化を図るべきか、道は二つあった。結局は後者が選択されたのであるが、その理由としては、実行の容易さのほか、ハイドリッヒが独ソ両国軍部の提携の可能性を過大に評価しており、赤軍幹部を罪に陥れることによってドイツ国防軍指導者をも連累させようという計算、さらにはハイドリッヒがナチスの信条の故に海軍から追放された時以来、彼が国防軍上層部にたいして抱いてきた病的憎悪が働いていたとみられる。こうしてドイツ側によるトゥハチェーフスキーらの反逆的行為を「立証」する証拠物件の偽造作業が日程に上った¹²⁾。

9) W. Hagen, *Die geheime Front, Organisation, Personen und Aktionen des deutschen Geheimdienstes*, Stuttgart, © 1950. W. Schellenberg, *The Labyrinth, Memoires of Hitler's Secret Service Chief*, N. Y., 1956.

10) クリヴィツキーによれば、スコブリンは「ペテルブルク・オペラ座」の歌手であった妻を通じて HKBД と結びつき、ゲシュタポ支配下の在パリ白系ロシア人組織に潜り込み、同時に「帝制在郷軍人会」の指導者の一員でもあるという「三重スパイ」を演じていた。（Krivitsky, op, cit., pp. 238-39）

11) クリヴィツキーも、1936年12月をスターリンの赤軍幹部に対する精算を決意した時点としてあげているが（*ibid.*, pp. 212-13）、この決意を外交面での独ソ秘密折衝の大幅な進展と関連させているのは誤りである。独ソ関係はこの時期にいささかも改善された形跡はなく、またその可能性もなかったのが真相である。 Cf. G. L. Weinberg, *The Foreign Policy of Hitler's Germany, Diplomatic Revolution in Europe 1933-36*, Chicago & London, 1970, pp. 310-312. A. B. Ulum, *Expansion & Coexistence, the History of Soviet Foreign Policy*, N. Y., 1968, p. 238.

12) Hagen, a. a. O., SS. 57-62. これに対して、ハイドリッヒは、トゥハチェーフスキーのクーデタが

以上のヘッテルの証言では、ハイドリッヒがうまうまとスコプリン（実は НКВД の手元）の情報を真に受けたかのような印象を与えられるが、シェレンベルクによれば、もともこの情報を持ち込んだ党副総統ヘスに近い情報ゴロ、ヤーンケ（Jahnke）は別意見であり、彼は問題の情報がスターリンによって故意に流されたものではないかとの疑念を一応は持ち、ハイドリッヒにも慎重な行動を求めたとされている。つまりスターリンは、トゥハチーフスキーがドイツ参謀本部と拮抗してソヴェト政権打倒の陰謀を図っているとの情報をわざと流すことによって、ハイドリッヒに国防軍統帥部に対する疑心をかき立てると同時に、赤軍幹部を弾圧するための「物証」をドイツ側情報機関のルートから回収するという手の込んだ芝居を仕組んでいるのではないか、というわけである。しかしハイドリッヒは、ヤーンケの推理に組せず、反対にヤーンケの見解は国防軍首脳に対する忠義立てからきていると邪推し、直ちにヤーンケを3カ月間自宅に監禁した¹³⁾。ともかくシェレンベルクが、ハイドリッヒを中心に進められた偽造作業の予備段階として、赤軍と国防軍の歴史的関係の調査にとりかかったのは37年初頭であった。

独ソ両軍首脳の「共謀」を立証する文書偽造の本番の過程は大分ミステリーじみてくるが¹⁴⁾、ヒトラーの手元に問題の文書が提出されたのは5月始めのことであった¹⁵⁾。つぎの問題は、この「証拠物件」をソ連側秘密警察に渡し、スターリンの眼にふれさせることであった。しかもそれをいかにも本物らしくみせかけることが必要であった。

まずSS係官が、プラハ在住のドイツ系市民を通じてチェコスロバキア大統領ベネシュの腹心の一人と接触して、「極秘文書」の存在を示唆し、ベネシュは直ちに友邦（チェコスロバキアはソ連と1935年5月、相互援助条約を締結していた）の危機を警告する親書をスターリンに送った。これに対するスターリンの返書は同じ回路を通じてハイドリッヒのもとに届けられ、そのあとで НКВД 長官エジョーフ（Ежов, Н. И.）の信任状を帯びたスターリンの特使によって問題の物件の買取りが行われるという段取りを経て、シェレンベルクによれば、5月には偽造文書がソヴェト側に渡り、赤軍将官の告発・処刑の動かぬ証拠となったとされるのである¹⁶⁾。ただし、ベネシュからスターリンへの通報については、ベネシュ自身は異った説明を与えている。すなわち36年秋以降、ドイツ側のイニシアティブによって両国の和解をめざす秘密交渉が行われていたが、37年1月後半、ドイツ側仲介者

成功すれば、ドイツにおいても、国防軍によるヒトラー体制にたいする同様の企てがなされるおそれがあるという理由で、クーデタ阻止の方に賭けた、という見方もある。Vgl. G. Buchheit, *Der deutsche Geheimdienst, Geschichte der militärischen Abwehr*, München, 1966, S. 164.

13) Schellenberg, op. cit., pp. 23-26.

14) たとえば、シェレンベルグは、国防軍参謀本部と赤軍首脳との「共謀」関係を立証する資料を手に入れるために、夜陰にまぎれて参謀本部と「防諜部」の秘密記録室に特別作業班を送り込み、必要な資料を盗み出したうえ、犯行湮滅のため火を放って遁走したとしているが (ibid. pp. 26-27)、赤軍統帥部の歴史に関する老犬かつ綿密な研究を行った J. Erickson は、そうしたスパイ映画もどきの活動はありえなかったとしつつも、「偽造」について「防諜部」長官カナリス提督の協力はえられなかったものと推定している。(J. Erickson, *The Soviet High Command, a Military-political History 1918-1941*, London, 1962, pp. 434-435) なおシェレンベルグは、独ソ両軍首脳部の間に真正正銘の「共謀」が実在していたかのように主張しているが、これは1920年代から1933年9月まで存続したドイツ軍と赤軍の一定の提携関係の読み違いであるように思われる。

15) Hagen, a. a. O., S. 64.

16) Schellenberg, op. cit., pp. 27-28.

トラウトマンズドルフ伯 (Trauttmansdorff, M. K. zu) とチェコ公使マストニー (Mastný, V.) との会談で、前者がたまたまトゥハチェーフスキー元帥、ルイコフ (Рыков, А. И.) (前人民委員会議長) その他から成る「反スターリン派」とヒトラーの接触を口に出し、この報告を受けたベネシュは直ちにチェコ駐在ソ連公使アレクサンドロフスキー (Александровский, С.) を通じて、スターリンにそのことを連絡したというのである¹⁷⁾。ここにみられるようなスターリンへの通報内容や通報時期の喰いちがいに関する疑問は、ソ連側情報機関が、やがて「極秘情報」に脚色されて還流する筈の赤軍幹部に不利な情報をさまざまなチャンネルに流し込んでいたとみることによって一応解消するであろう。いずれにしても、スターリンが単純にドイツ側の謀略にかかったわけではないことだけはたしかである¹⁸⁾。

しかもこうして手に入れた偽造文書が、トゥハチェーフスキーらの裁判で被告達につきつけられたかどうかすら、必ずしもはっきりしない。ソ連の反体制派の歴史家メトヴェージェフ (Медведев, Р.) は、偽造文書はこの裁判でも、その直前の「軍事会議」(Военный Совет) にも提出されなかったと断じ、スターリンは37年始めにはトゥハチェーフスキーの「反逆罪」に関する「確実な情報」(これ以上に確実な情報がまたとあろうか!) をすでに握っており、「軍事会議」では、出席者はすでに逮捕されていた一赤軍将校のトゥハチェーフスキー告発の「自白」を聞かされたただけであったとしている¹⁹⁾。もしナチス秘密情報機関による「偽造」文書が単に赤軍幹部粛清の事後的カモフラージュとして利用されたすぎないとするならば、スターリンの意図は一体どにあったのであろうか。これが次に取り組むべき問題である。

2. 粛清の背景—軍事的効率と政治的忠誠

トゥハチェーフスキー以下の赤軍最高首脳の処刑の理由とされた外部勢力(ナチス・ドイツ)との通謀ないしスパイ活動が事実無根であったことは、すでに見た通りである。ではこれら粛清の犠牲者達は、外国勢力とは無関係の独自のスターリン打倒の陰謀を計画していたのであろうか、あるいは少なくともスターリンの眼から見て、かかる陰謀を存在を推

17) E. Beneš, *Memoires of Dr. Eduard Beneš, from Munich to New War and New Victory*, London, 1954, p. 20, 47 note 8.

18) ネクリッチは、スターリンはトゥハチェーフスキーらの告発が根拠のないものであり、証拠も偽造であることを知っていたと断言している。(V. Petrov, *op. cit.*, p. 134) 事実、当時ドイツ国防軍参謀本部外国課ロシア班長であったシュパルケ将軍 (Spalke, H.) は、ハイドリッヒの「偽造証拠」が赤軍将星抹殺の原因であったとする云分を、ハイドリッヒの「大法螺」と一蹴しており (G. Buchheit, *a. a. O.*, S. 165), また当時の駐ソ・フランス大使クーロンドル (Coulondre, B.) の本省あて報告 (37年2月10日) でも、1月末以来のトゥハチェーフスキーの身边をめぐる不吉な動静を伝えていた。(Documents diplomatiques français 1932-1939, 2^e Série, tome IV, Paris, 1967, pp. 731-32.)

19) Roy A. Medvedev, *Let History Judge, the Origins and Consequences of Stalinism*, N. Y., 1971, pp. 300-301. またクリヴィツキーと同じく粛清の危険を感じて1938年7月、スペイン内戦の戦場から西側に亡命した НКВД 外事部の大物の一人、オルロフも、外事部長代理シュピーゲルグラス (Shpigelglas) から、トゥハチェーフスキーらが裁判にもかけられないで銃殺され、特別法廷の判士はそのあとで、エジョーフから「陰謀」の存在を伝えられ、判決に署名せざるをえなかった旨打明けられたと記している。(A. Orlov, *The Secret History of Stalin's Crimes*, N. Y. 1953, pp. 236-237).

測させる何らかの動きがあったのであろうか。この問題を検討することが、とりもなおさずスターリンの側での赤軍首脳部抹殺の動機の究明につながるであろう。

まず赤軍の粛清がそれ自体孤立したものではなく、旧反対派のみならず、スターリン支持者をもまき込みつつ進行していた大量弾圧の渦中でおこったことを見逃してはならない。粛清（чистка）そのものは党の歴史において決して目新しいものではなかったが、以前の粛清の主な目標が、墮落分子、政治的反対派の除名、罷免によって党・ソヴェト機関の戦闘性の強化を図ることにあっただのに対し、1936年9月末、「血に飢えた小人」と恐れられたエジョーフの内務人民委員就任後の粛清は、「スターリン政権自身の内部」に向けられ、かつテロルを「基本的内容」とする点において、比較を絶したものとなったのであった²⁰⁾。

粛清の第一の転機は、キーロフ暗殺事件であった。事件の直後、党中央委員会は秘密指令を全党組織に送り、党員に対して警戒心の昂揚を求めるとともに、ジノーヴィエフ（Зиновьев, Г.），カーメネフ（Каменев, Л. В.），トロツキー（Троцкий, Л.）支持者の即時根絶を訴えた²¹⁾。すでに33年6月から始められていた従来の手続きを踏襲した粛清カンパニアが、この決定によって異常に拍車がかけられたことは想像に難くない。こうして33年6月から35年春までに191万6,500名の党員及び同候補が粛清の対象となり、うち18.3%が除名処分に付せられたが²²⁾、その過程で発見された多くの党組織の「怠慢」に愕然となった党中央は、35年5月、党員証、登録カードの点検に名を借りた本格的な粛清を決定し、同年12月の中央委員会総会の決議を受けて、翌36年春以降、党員証の交換が実施され、いわゆる「敵性分子」の徹底的追求に移っていった²³⁾。そして7月29日、「トロツキー・ジノーヴィエフ派反革命ブロックのテロ活動について」という中央委極秘文書が各級委員会に配布され、目前に迫った「合同本部事件」裁判の開廷を予告して全党員の「ボリシェヴィキ的警戒心」の発揚を訴えた²⁴⁾。こうして8月の「合同本部事件」裁判（ジノーヴィエフ、カーメネフ以下16被告）に続いて37年1月には「並行本部事件」（ピャタコーフ（Пятаков, Г. Л.），ラデック（Радек, К.）以下17被告）裁判が公開審理で行われ、弾圧の鋒先が今や左右両派のいずれを問わず、スターリン体制の一切の潜在的批判者と目される者すべてに向けられていることは明らかになった。粛清のテロルは第2段階に入った²⁵⁾。

20) 外務省調査部第三課「ソ連邦国力総合調査第一次報告」（昭和14年1月），89-91ページ。

21) M. Fainsod, *Smolensk under Soviet Rule*, Cambridge, 1957, p. 231.

22) この粛清は本来、急激な工業化がもたらした入党者の激増に伴う「水ぶくれ現象」にブレーキをかける狙いがあったが、キーロフ事件以後、非スターリン派の排除の手段に転化し、数々の「行き過ぎ」を生んだことは、「党史」も認めるところである。なお被除名者のうち、「党・国家規律違反者」は20.9%、「道徳的腐敗分子・出世主義者・官僚主義者」21.5%、「敵性階級分子」16.5%、「非積極分子」23.2%の比率であった。（П. Н. Поспелов и пр. (глав. ред.), *История Коммунистической Партии Советского Союза*, т. IV, кн. II, М., 1971, стр. 283.（以下 *История КПСС* として引用）

23) Таме, 283-85.

24) 英訳全文は R. McNeal (ed.), *Resolutions and Decisions of the Communist Party of the Soviet Union*, vol. 3, Toronto, 1974, pp. 167-81.

25) M. フェインソードは、ジノーヴィエフ・カーメネフ裁判において、被告の「自白」のなかで「右派」指導者の名前が仄めかされたことをもって、粛清の第2の転機の到来の予告、エジョーフの内務人民委員就任をもって、第2段階の本格的開始を画するものとしている。（M. Fainsod, *How*

B. ムーアは、その著書『ソ連邦におけるテロルと進歩』(1954年)のなかで、ソ連における粛清について鋭い原理的考察を行っているが、それは多くの歴史的事実がその後明らかになった現在もなお妥当性を失っていない。ムーアによれば、ソ連における「制度化されたテロル」は、社会構造のラディカルな変革→反対派の表出→反対派の結束→テロルの強化という後進国革命の歴史的循環モデルの殆んど純粋な発現形態であるとされる²⁶⁾。しかしテロルが急激な工業化と都市化と相俟って伝統的な社会的紐帯を切断し、社会の「原子化」を促進した限りにおいて、テロル機構の行き過ぎをチェックする「多元的権力核」(自主的集団)をも完全に粉碎することになり、結局は党に向けられるべき忠誠心の個人レベルへの回帰を必然化し²⁷⁾、テロル的方法が本来志向したより高次の社会的統合を却って阻害することになった、と彼は説くのである。

このようにみえてくるならば、大粛清の時代に、赤軍という独自の利害関心を持つ組織集団がいつまでも暴風の圏外に留まりうる可能性は、客観的にはなかったといえてよい。集団化と工業化の激動期に赤軍が体制の安定要素としての役割をこれまで果してこれたのは、赤軍が5カ年計画における最大の受益者たる地位を享受してきたことと結びついていた。たとえば、5カ年計画(特に第2次)における国防部門の優遇²⁸⁾はいうまでもなく、33年から35年春までの粛清過程においても軍隊における除名と降等処分²⁹⁾の率が、軍以外の組織のそれと比べてはるかに低かったことが挙げられよう。すなわち軍党組織における除名・降等処分(党員から党員候補ないし同調者への)は、それぞれ3.5%、2.4%であったのに対し、他の組織では17%、6.3%であった²⁹⁾。さらに命令系統を明確化し、あわせて指揮官層の社会的威信を高めるという一石二鳥の効果を狙った「価値付与」(H. ラズウエル)も他方では進められていた。33年4月、政治部門担当副指揮官制の導入が決定されて、25年3月に承認された「単一指揮」原則は大きく前進し³⁰⁾、35年9月、赤軍参謀部は赤軍参謀本部に改組されるとともに、指揮官、隊長の「権限と権威」を正確に反映させるという理

Russia is ruled, Cambridge, 1958, p. 371.) なお、エジョーフの統制委員会議長から内務人民委員への転出は、粛清のスピード・アップのため、スターリンじきじきの命令によるものであった。(邦訳『フルシチョフ秘密演説』, 74 ページ)

- 26) B. Moor, Jr., *Terror and Progress USSR, Some Sources of Change and Stability in the Soviet Dictatorship*, 1954, pp. 172-173. もちろんムーアは社会主義革命のみを念頭においているわけではなく、多くの歴史の変革(「過去との急激な断絶」)が広い意味での「革命的暴力」を伴うことは避けられないのであり、ただそれを「抑圧的暴力」に退化させないことこそが問題であると指摘している。 Cf. B. Moor, Jr., *Social Origins of Dictatorship and Democracy, Lord and Peasants in the Making of the Modern World*, Boston, 1966, esp. pp. 484-508.
- 27) Moor, *Terror and Progress USSR*, pp. 160-61. この自発性の喪失を代償として党支配の拡大がえられることになる。
- 28) *История КПСС*, стр. 398-399. さらに赤軍の近代化・増強の具体的ケース(たとえば民兵・常備軍混成体制から常備軍制への移行、空軍・機械化部隊などの兵種の独立編制など)については、Ю. И. Кораблев, М. И. Логинов (ред.), *КПСС и строительство вооруженных сил СССР (1918-июль 1941)*, М., 1959, стр. 336-41.
- 29) Ю. П. Петров, *Строительство политорганов, партийных и комсомольских организаций и флота (1918-1968)*, М., 1968, стр. 225-26. もっとも、その後の粛清の強化により、軍内部の党員数は激減し、たとえばバルト艦隊では1934年7月から1936年7月までの間に党員(含同候補)数は10,729人から7,127人へ33.6%も減少している。(там же. стр. 227)
- 30) *История КПСС*, стр. 410.

由で下士官，将校，将官，元帥の階級制が復活され，将校については，国防人民委員の承認なしには民間機関による逮捕は禁止された³¹⁾。こうして，11月には，トゥハチーフスキーは元帥，ヤキール，ウボレーヴィチは一等司令官，コルクは二等司令官，ガマルニクは一等軍団コミッサール（いずれも将官に相当）にそれぞれ任命されたのであった。

軍が支配機構のなかで相対的に恵まれた立場にあったかにみえていたとき，しかしながら，トゥハチーフスキー事件の予兆を示す暗雲が地平線の彼方に立ち現われてきた。「合同本部事件」裁判の被告のなかに，ムラチコフスキー（Мрачковский, С.）スミルノフ（Смирнов, И.）といった国内戦時代の軍事指導者が含まれていたことは，粛清の手が軍統帥部にもやがては及ぶであろうことを暗示していたが，果せるかな7月始め，キーエフ軍管区のシュミット（Шmidt, Д）師団長がまず逮捕された。彼は天成のゲリラ戦指導者として国内戦で活躍し，25年から27年にかけてトロツキー派に属し，トロツキーの追放をきめた第15回党大会（27年12月）のさいスターリンを面罵するという野人ぶりを発揮したといわれる³²⁾。シュミットは，「合同本部」の陰謀に加担していた旨の「自白」の後，ひそかに銃殺された。

元トロツキー派の將軍の次の犠牲者はプートナであった。プートナは，ジノーヴィエフ・カーメネフ裁判の証言で名前が上っていたが，秋には任地のロンドンから召還され，そのまま拘禁された³³⁾。

「合同本部事件」裁判ののち，スターリンは粛清メカニズムの再検討を余儀なくされるような事態が持ち上ったらしい。「らしい」というのは今日まで，これを裏付ける確実な資料がないからであるが，一説によれば，36年9月始めに開催された中央委員会総会ではブハーリン（Бухарин, Н.），ルイコフ（Рыков, А. И.）ら，いわゆる「右翼反対派」に対する訴追を要求したエジョーフの動議が三分の二の多数で否決され，軍を代表する中央委員（ヤキール，ガマルニク），同候補（ウボレーヴィチ，トゥハチーフスキーのほか，エゴロフ（Егоров, А. И.）参謀総長，ブリュヘル（Блюхер, В. И.），特別極東軍司令官ブーリン（Булин, И. А.）政治本部長代理）は，スターリン派と目されていたヴオロシロフ国防人民委員，ブジョンヌイ（Вудённый, С. М.）騎兵監を除き，全員これに同調したといわれる³⁴⁾。もっとも元ソ連共産党員であったウラロフ（本名 А. Авторханов）のこの情報は一概には信じがたい。問題の中央委員会9月総会の開催の真否についてはソ連側文献には全然言及されていないし，エジョーフがスターリン直々の命令で内務人民委員に就任するのは，9月も末のことだったからである³⁵⁾。ただ中央委員会のなかにスターリンの「個人崇拜」的風潮の行き過ぎに対して歯止めをかける必要を感じていた者は，そのリー

31) Ю. Бобков, К истории воинских званий в советских вооруженных силах, «Военно-Исторический Журнал», IX, 1970, стр. 86-88. またこの時期の指揮官層の実態については, К. Ф. Скоробагаткин и пр., 50 лет вооруженных сил СССР, М., 1968, стр. 210-218.

32) Erickson, op. cit., p. 426.

33) М. М. Зомов (ред.), Малшал Тухачевский, М., 1965, стр. 230.

34) A. Uralov, The Reign of Stalin, London, 1953, pp. 41-42.

35) 36年9月10日, 「合同本部事件」に関連してブハーリン, ルイコフ, トムスキー (Томский, М. П.) に対して行われていた予審の終了と不起訴が発表されたこと («Правда», 10. IX, 1936) は, あるいは党内のかかる反対傾向と関係があったのかもしれない。

ダーと目されていたキーロフ³⁶⁾の死後も、なおすっかり後を絶ってはいなかったことであろう。たとえば重工業人民委員 (36年初頭以降、軍事工業の特別責任者となっていた)³⁷⁾でスターリンと同郷であったオルジョニキッゼ (Орджоникидзе, Г. К.) の急死 (37年2月18日) をめぐる謎は、彼がスターリンのテロル粛清のやり方に対して反対していたことを示唆している³⁸⁾。

ともかく、スターリンはしばらくの〈息つぎ〉を置いたあと、弾圧の第二波をとき放つ作業にとりかかった。36年11月のケメレヴォ (西シベリア) における技師・技術者の「破壊行為」に対する裁判が行われ、翌37年1月の「並行本部事件」裁判に「首謀者」の一人としてピャタコフ重工業人民委員代理が引き出されたことは、ある意味でスターリン体制の最も忠実な支持基盤であるテクノクラート層もまた、テロル粛清を免がれえない運命にあることを示すものにほかならなかった³⁹⁾。1月公判で、ラデックは「一味」のプートナの活動に関連してトゥハチェーフスキーの名前をあげ、ヴィシンスキー (Вышинский, А. Я.) 検事総長からさらに追究されると、後者と「並行本部」グループとのつながりを即座にきっぱり否定していたが、「人民の敵」からの忠誠証明は決してトゥハチェーフスキーの潔白の証しになるとは思われなかった。すでに前年11月にプリマコフが監禁されていたし、年が明けてから軍司令官クラスの人事異動があわただしく行われていたことは、統帥部の団結の分断を企図したものであった⁴⁰⁾。

大量弾圧の第二の波をとき放す直接の契機となったのは、37年2月23日から3月5日まで続き、ブハーリン、ルイコフの除名を決定した中央委員会総会であった。3月3日と、5日の両日、スターリンは反ソ分子の徹底的根絶の必要をあらためて強調し、それを合理化するために、ソ連における社会主義の建設が成功すればする程、国内の階級闘争は激化し、今日ではトロツキズムは「労働者階級内の政治的一潮流」ではなくなり、「外国スパイ機関に雇われて働く無原則、無思想な妨害者、謀略者、スパイ、殺人者の徒党」に転落した、とする理論を持ち出した⁴¹⁾。もしこの「理論」が機械的に適用されるならば、「トロツキスト」の範囲は無限にふくらみ、しかもその烙印を押された者に対しては、「スパイ」と同じ極刑が待っていることだけは確実であった。同じ演説のなかでスターリンが、「戦闘での勝利をくつがえすには参謀部のなかの2、3のスパイで充分である」と無気味な皮肉を飛ばしたのに呼応して、モロトフ (Молотов, В.) 人民委員会議長は「軍幹部の殺戮を直接煽動し、総会参加者を『人民の敵』に対する熱意の不足のかどで叱責した」とされている。

モロトフの発言は、ソ連でこれまで出版された党=軍関係史では最も詳しく新事実も盛

36) 第17回党大会 (34年1月) でキーロフを中心としてスターリンを書記長から解任しようとする動きがあったことはたしかのようである。См. С. Красников, Сергей Миронович Киров, М., 1964, стр. 194-95. В. I. Nicolaevsky. Power and the Soviet Elite, Ann Arbor, 1975, p. 92

37) История КПСС, стр. 399.

38) L. Schapiro, The Communist Party of the Soviet Union, 2nd ed., London, 1970, p. 413.

39) J. A. Armstrong, The Politics of Totalitarianism, the Communist Party of the Soviet Union from 1934 to the Present, N. Y., 1961, pp. 54-55.

40) Erickson, pp. 449-451.

41) «Правда» 29, III., 1937. (邦訳は、『スターリン主義とアルバニア問題』, 合同出版, 1962年, 282-324ページ)

り沢山の Ю. ペトロフの著書⁴²⁾に引用されているものであるが、その後の事態の進行について、同書は次のように述べる。

中央委員会総会の直後から、内務人民委員部は、「赤軍」における「反革命軍事ファシスト組織」という架空の組織に対する攻撃に取りかかり、6月1日から4日にかけての「拡大軍事会議」では、赤軍内の「陰謀組織」が討議の焦点となり、席上スターリンは「偽造の証拠」を援用して軍に巣くう「陰謀分子」の影響の絶滅を強く訴えたのであった⁴³⁾。ここでいう「偽造の証拠」なるものが、例の SD=HKВД 合作文書そのものではないにしても、それと何らかの関係のあるものであったことは疑いないであろう。さらにこの会議には、トゥハチーフスキー以下のやがてテロルの犠牲者となるべき将軍は出席していなかったとみるのが妥当である。なぜならば、すでに捕えられていたプートナ、プリマコフにつづいて、コルク（5月11日）、エイジェマーン（5月22日）、トゥハチーフスキー（5月26日）、ウボレーヴィチ（5月29日）、ヤキール（5月31日）と次ぎつぎに逮捕されてしまっていたからである⁴⁴⁾。このように5月に入ってから赤軍最高幹部が一網打尽に逮えられたことからみて、既述のように、「偽造証拠」が HKВД の手を経てスターリンのところに届いたのがおそくとも5月始めであるとすれば、この「証拠」が少くとも弾圧計画の実施時期を決定するに当たってきわめて重要な要因として作用したとみてよいであろう。

それでは赤軍最高幹部の間にナチス・ドイツとの「通謀」は論外としても、反スターリン「陰謀」の計画は実際存在したのであるか。それともそのような「陰謀」はスターリンの偏執狂的白昼夢にすぎなかったのであるか。I. ドイツチャーは、トゥハチーフスキーを指導者とする宮廷革命型のクーデタ計画が練られており、スターリンの暗殺と Г. П. У.（国家政治部）本部の占領がその目標となっていたことは疑いない、としている⁴⁵⁾。しかし軍に対する弾圧の予兆はかなり前から現われており、首脳部の逮捕も同時に行なわれたわけではないから、もし彼らの間に「陰謀」計画がありとすれば、当然に先制攻撃に出るべきであったし、反対に準備不十分のところを急襲されたとしても、反抗ないし逃亡は可能であった筈である。背後に強大な武装集団を控えていた彼らが反抗も逃亡の試みもしないまま、刑場の露と消えたこと自体、かかる「陰謀」が存在しなかったことを雄弁に物語っているのではなかろうか。

他方、スターリンの側に立って見れば、状況は全く異って映るであろう。さきに挙げたムーアの図式が示すように、スターリンが国の工業化を「むち」をもって推進しようとする

42) Ю. П. Петров, Партийное строительство в советской армии и флоте, деятельность КПСС по созданию и укреплению парлиторганов, партийных и комсомольских организаций в вооруженных силах (1919-1961 гг.), М., 1964, стр. 299.

43) Там же, стр. 300.

44) 日時は, R. Conquest, The Great Terror, N. Y., pp. 211 et seq. に散見されるものを、いくつかのソ連側文献と照合したものである。

45) I. Deutscher, Stalin, a Political Biography, (Oxford paperbacks), London, 1961, p. 379. (邦訳(上原訳)『スターリン』II, みすず書房, 昭和43年, 65-66ページ) 厳密には ГПУ は1923年7月, ОГПУ (合同国家政治部) に改組されて НКВД から独立したが, 34年7月, 再び НКВД に吸収され, ГУГВ (国家保安部) と改称された。

る限り⁴⁶⁾、下からの自発性と創意は軽視されることになり、逆に上からの強制と監視の網からはみ出た者、あるいはそれからはみ出る可能性を秘めた者のなかに、常に「体制」に対する悪意と陰謀の匂いを嗅ぎとり、これに容赦なく弾圧を加えずにはおかないというタンタロスの不安から逃れることはできなくなったことであろう。ここにオールド・ポリシエ・ヴイキ達への、ついでテクノクラートへの迫害は、独自の制度となりうる軍中枢部に対する予防攻撃に発展せざるをえない。軍が技術的中立性のタテ前に隠れて強大な物理的暴力の貯水槽と化すおそれがあればある程、外部世界からの軍事的脅威と相まってスターリンの不安は増大してゆくからである⁴⁷⁾。

こうしてスターリンにとっては、既存の軍の背骨を叩き潰しながら、それと同時に、党の統制の貫徹する戦闘＝技術集団を再生してゆくというまさに至難な課題が立ち現われることになる。まず軍における党の影響力の低下（これは粛清の時期に、赤軍の増強が休みなく続いたことの不可避的な結果でもあった）を喰いとめ、同時に軍首脳部に対する弾圧に伴う動揺をあらかじめ防止する意味もかねて、37年5月8日、中央委員会は、軍管区、軍、艦隊に3名（司令官他2名）よりなる「軍事会議」、連隊（часть）、師団（соединение）、国防人民委員部の本部（штаб）および部局（управление）、軍施設（учреждение）に軍事コミサール、中隊に政治指導員^{ポリトルーク}を設けることを決定、さらに6月7日には、従来の政治部門担当副指揮官が軍事コミサールに任命され、「単一指揮」制は一朝にして廃止された⁴⁸⁾。軍管区の「軍事会議」のメンバーは最初、司令官、「専従政治活動家」、管区政治部長とされたが、7月には管区政治部長の代りに、州・地方委員会書記もしくは民族共和国中央委員会書記がメンバーとなり、このしばらく後に、管区政治部長は「専従政治活動家」の単なる代理として位置づけられた⁴⁹⁾。「専従政治活動家」とは、НКВД から派遣された目付役の別名であると西側研究者はみており、戦術・戦略段階では「軍事会議」を通じて軍事

46) スターリンは33年1月の中央委・中央統制委合同総会の席上、「国にむちをあて」る必要を公然と語っている。（И. В. Сталин, Вопросы Ленинизма, 11-е из., М., 1952, стр. 411.）しかも、第一次5カ年計画完了時（1932年）において、たとえば年産90億ルーブルの生産能力のある機械生産が実際には66億ルーブルにとどまり、また日産2万1,500トンの銃鉄生産能力をもつ溶鉱炉の生産実績が1万8,000～1万9,000トンを越えなかったように、生産設備と生産性の間の大きな落差は、スターリンに「むち」の必要を一層痛感させたことであろう。生産性向上のドライブが、同時に猛烈な「精神主義」と結びついた理由もここにある（スタハーフ運動のもう一面）。См. История КПСС, стр. 240.

47) 軍の近代化は、国内戦時代の「英雄主義」からの袂別なしには不可能であり、同時に党の政治的統制とも矛盾する面をもつ。トゥハチェーフスキーは逮捕の直前（5月3日付『赤い星』紙）に発表した、彼が心魂を傾けて起草した「新野外操典」（Боевой Устав РККА）の解説論文のなかで、赤軍が「特別の」機動能力を持つとする意見を国内戦の経験の遺物として激しく批判した。これは明らかにパルチザン出身の軍事指導者（典型はブジョンヌイ騎兵監）に向けられたものであったが、同時にスターリン統治方法の「非合理性」への批判にも連なるものであった。（М. Н. Тухачевский, Избранные произведения, т. II (1928-1937 гг.) М., 1964, стр. 245-259）また赤軍に対する弾圧が、兵種では空軍、機甲部隊、機械化部隊においてその打撃が最も強烈であったといわれるのも、「技術」と「政治」の矛盾・相剋と無関係ではないであろう。（Петров, Партийное строительство ..., стр. 300）この点で、37年12月、新設の海軍人民委員部の責任者に赤軍政治本部長スミルノフ（Смирнов, П. А.）が転補され、政治本部長にスターリンの寵児メフリス（Мехрис, Л. З.）書記局員が就任していることが注目される。（«Правда», 31, XII, 1937）

48) Петров, Строительство политорганов ..., стр. 238.

49) Там же, стр. 239.

専門家のみならず、本来の「政治将校」の権限もまた大幅に衷われるに至った⁵⁰⁾。

他方、新しい赤軍幹部の養成については、36年11月、高級指揮官および参謀将校のための参謀本部大学が、従来からあったフルンゼ名称労農赤軍軍事大学より独立し、その卒業生が粛清によって空白になったポストをうめていき、反対に粛軍が猛威を振った37年5月から39年までフルンゼ名称軍事大学では徹底的な機構改革が行われていたもようである⁵¹⁾。スターリンは、知識と経験を犠牲にしても、忠誠については、一点の疑いもない親衛隊的高級将校を確保しようとしたわけである。

こうして36年から38年(2月、中央委員会、軍隊における入党促進を決定)までの軍部を襲った徹底的な粛清によって、軍の「政治化」もまた大きく前進し、全く新しいエスプリ・ド・コールをもつ戦闘集団に生まれ変わるための前提条件が一先ず出来上ったと見てよいであろう。これはまた粛清の発条としてあげた、旧型テクノクラートに対する「予防攻撃」の帰結でもあった。

3. むすびに代えて

前節において、トゥハチーフスキー事件として知られている赤軍将星の粛清の背景をみてきたのであるが、一旦こうして開始された粛清過程は、独自のモーメンタムをもって自転運動を始めることになった。その理由として考えられるのは次の2点である。まず、スターリンによって粛清の合理づけのために持ち出された「階級闘争激化論」は、要するに一切の潜在的批判要素を「スパイ」ないし「外国勢力の手先」と規定するものであったから、この「姿なき敵」の範囲は恣意的に拡大される可能性を始めからはらんでいたこと、第二に、テロルによる不断の「原子化」にさらされた社会では、パーソナルなつながりの価値を高め、もともと人間的な信頼関係を究極のより所とする軍隊ではこの傾向はさらに助長されることになるから、粛清は個人的つながりに沿って連鎖反動的に誘爆せざるをえないこと、である。

こうして軍幹部の粛清は、39年に入ってひっそりと止むまで、燎原の火のように荒れまくった。この期開の粛清の全貌をつかむのは容易ではないが、西側の研究者の推定では、犠牲者総数3万5,000名(将校団の約半数)、内訳は元師5名中3名、軍司令官(15名)のうち13名、以下同じく軍団長(85名)57名、師団長(195名)110名、旅団長(406名)220名、将官クラスの90%、大佐クラスで80%という数字が挙げられている⁵²⁾。ソ連側の

50) R. Kolkowicz, *The Soviet Military and the Communist Party*, Princeton, 1967, p. 58. 事実、弾圧による政治将校の犠牲も甚大で、38年始めの政治部員の数は全体で定数の1/3にすぎず、上級および高級政治部員の場合には半数が欠員のままといい、惨澹たる状態であった。(Петров, *Партийное строительство ...*, стр. 307) 最高段階でも、合議制統帥組織としての「赤軍中央軍事会議」が新設された(38年3月)(Петров, *Строительство политорганов, ...*, стр. 240)し、それより前、37年4月には、防衛問題の最高統轄機関として、7名のメンバーからなる「国防委員会」が人民委員会に付置されていた。(К. У. Черненко, Н. И. Савинкин (сост.), *КПСС о вооружённых силах Советского Союза, документы (1917-1968)*, М., 1968, стр. 277)

51) С. Лотоцкий, Академии имени М. В. Фрунзе—50 лет, *«Военно-Исторический Журнал»* XII, 1968, стр. 46-55. この論文によれば、軍事大学校長はコルクの逮捕された1937年5月から1939年まで空位のままとなっている。

52) たとえば R. L. Garthoff, *How Russia makes War, Soviet Military Doctrine*, London, 1954, pp. 220-21.

数字では、総数は伏されたままであるが、将校団の1/5が粛清され、内訳は元帥5名中3名、軍管区司令官の全部、海軍司令長官2名、軍団司令官の全部、師団長、旅団長のほとんど全部、連隊長の約半分、管区軍事会議員、管区政治部長の約半分、軍団、師団、旅団の軍事コミサールの大半、連隊軍事コミサールの1/3、とされている⁵³⁾。もっとも犠牲者のうち1/4以上が独ソ戦開戦前後には現役に復帰したことになるから、(ソ連側の数字によれば)将校団の1/7近くが文字通り抹殺されたことになる。

いずれにせよ、粛清による有能で経験に富んだ多数の赤軍幹部の消滅が独ソ戦緒戦時におけるソ連軍の大出血の主たる原因であったことは否定できない。ネクリッチは、独ソ戦勃発当時、赤軍将校のうち高等専門教育を受けていた者はわずかに7%、37%はまだ中等専門教育すら完了していなかったと述べているし⁵⁴⁾、ソ連における人権擁護の闘士として有名なグリゴレンコ少将の舌鋒はさらに鋭く、あとで述べるネクリッチの著作をめぐる論争に関連して、もし粛清された赤軍幹部がそのままポストに留まっていたら、独ソ戦の被害ははるかに少かったであろうし、おそらくドイツの対ソ攻撃すらありえなかったであろう、とまで極言している⁵⁵⁾。

一方、フルンチョフの「秘密演説」に始まるスターリン批判が、スターリン時代からの強引な絶縁に与えられていた限り、フルンチョフの画いてみせたバラ色の「共産主義社会」の夢が崩れたとき、民衆の失望はスターリンが代表していたものへの漠然たる憧憬に変わってゆき、これに意識的に乗りかかる形で、いわゆる「非フルンチョフ化」が進んでゆくことになった。そのさい、「大祖国戦争」における勝利の組織者としてのスターリンがまずクローズアップされるのは当然であり、ここにネクリッチ事件が登場する⁵⁶⁾。

ネクリッチが前掲の著作を公刊したのは65年春のことであった。彼はこのなかで、独ソ戦直後の赤軍の敗北の原因を準備体制の不備に求め、その点に関するスターリンの責任をソ連国内で発行された類書にはみられない程の執拗さで追求しようとした。軍長老のヒアリングのほか西側文献もある程度偏見なしに利用されており、多くの興味深い事実も明らかにされた。しかしネクリッチがスターリンの「誤謬」の摘発に熱中すればする程「誤謬」が「誤謬」にとどまる限り一、結局、当時のスターリンを取巻く政治的・軍事的助言者を意志なき操り人形として描き出すことになるから、軍のベテランと党イデオログから猛烈な反撃を引き起すことになった。こうしてネクリッチの書物は発行後まもなく回収されて店頭から姿を消し、66年2月、モスクワで開かれたML研究所付属大祖国戦争史

53) M. M. Минасян и пр. (ред.), Великая Отечественная Война Советского Союза 1941-1945 (краткая история), 1965, стр. 39-40. なお1970年の同書第2版では、この数字はすっかり消え、粛清にかんする記述も簡略化されている。(стр. 45)

54) Petrov, op. cit., p. 136.

55) P. Grigorenko, Der sowjetische Zusammenbruch 1941, Frankfurt/Main, 1969, S. 83. しかし、逆に、赤軍幹部の粛清にもかかわらず独ソ戦で赤軍が発揮した強靱な戦闘力に驚愕したナチ幹部の間に、深刻な反省があったことも付け加えておかなければならない。たとえば43年10月4日、ポーゼンで行われたSS軍団長会議の席上、ヒムラー(Himmler, A.)は、37~38年の赤軍将官の粛清によって「ポリシェヴィズム体制」が弱体化したとする当時の判断は「決定的に誤っていた」と沈痛な告白をしている。Trial of the Major War Criminals before the International Military Tribunal, Vol. XXIX, 1948, Nuremberg, p. 111. (in 1919-PS)

56) 独ソ戦(特にスターリンの戦争指導)に関する歴史叙述と国内の政治的気流の変化の関連については、N. W. Heer, Politics and History in the Soviet Union, Cambridge, 1971, pp. 246-250.

部の会議では、ネクリッチの叙述に「非客観的」の烙印がおされ、翌年7月には彼は党から除名されるという結末を迎えなければならなかった⁵⁷⁾。ネクリッチに向けられた批判は、同書で取り上げられたテーマそのものというよりはむしろ、解釈の視座＝合法則的歴史発展モデルの「否定」にかかわるものであったが⁵⁸⁾、ともかくこれ以後、歴史的スターリン像の再修正が徐々に進んでいることはたしかであり、最近の『軍事史雑誌』(Военно-Исторический Журнал)では粛清の問題は完全にタブー化されてしまったように見える。もっとも、このスターリン像の再修正が直ちにスターリンの「復活」につながるわけではなく、スターリンの全称否定のうえに成立していた「スターリン批判」に比べ、ある意味ではより堅実な方向も出かけているのであるが。

本稿では、紙面の都合もあり、検討すべき多くの問題点を残したままに終わっている。とりわけ、赤軍粛清とソ連をとりまく国際環境の関連（もちろんクリヴィツキー説とは別の角度からの）、新テクノクラート型専門家の育成、軍部と НКВД の関係などである。そのほか粛清に反映したスターリンの精神病理学的性格構造の問題もたしかに無視することはできないであろう。しかし筆者は精神分析的方法の歴史研究への安易な適用には今なお疑問を持つものであり、基本的にはスターリンの行動・動機のいわば合理主義的な解釈は十分に可能であると考えていることを最後につけ加えておきたい⁵⁹⁾。

57) この討論会の模様は西側にひそかに持ち出された会議参加者のメモからある程度窺うことができる。(Petrov, op. cit., pp. 246-261)

58) См. Г. А. Деворин и Б. В. Телпуховский, В идейном плену фальсификаторов истории, «Вопросы Истории КПСС», IX, 1967, стр. 127-140.

59) スターリン像の再構成に精神分析の手法をとり入れたものに R. タッカーの最近の研究があるが (R. C. Tucker & S. F. Cohen (ed.), The Great Purge Trial, N. Y., 1965, pp. IX-XLVIII. R. C. Tucker, Stalin as Revolutionary 1879-1929, N. Y., 1973), これに対し「合理主義」的スターリン像を描き出した最新の大著として, A. B. Ulum, Stalin, the Man and his Era, N. Y., 1973. が挙げられる。

The Tukhachevsky affair and its origins

Tomoyoshi HIRAI

In June of 1936 Marshal Tukhachevsky and seven other Red Army leaders were shot to death on charges of their collusion with the Reichswehr and treason against the Soviet Union. The Tukhachevsky affair signaling the wholesale bloody purge of the Red Army's officer corps could not but get the world thoroughly perplexed. People tried in vain to know the truth behind it.

Before the Second World War a former Soviet intelligence officer who fled to the West revealed an interesting story to the effect that Stalin had been so eager to come terms with Hitler that he decided to kill the generals whom he considered most likely to oppose any future rapprochement between the Soviet Russia and Nazi Germany. Accordingly, via Gestapo he imported the necessary evidence for the execution of the generals. This procedure was indispensable to give authenticity to the evidence. After the war, this version was echoed with some variance by the Nazi counterpart, and N. Khrushchev, too, made mention of it at the XXII Party Congress.

This paper aims first to reconstruct the true picture of the dealings between Gestapo and NKVD. The author has arrived at the conclusion that the smuggled forged evidence seemed to be just used as a pretext for the condemnation of Tukhachevsky and the others. Hence the second problem; what was then the basic motivation which drove Stalin to sacrifice the military elite, regardless of the devastating effect on the Red Army, at least, in the short run. Now that all the victims in this case have been officially rehabilitated in Soviet Russia, it is out of the question that they should have committed some kind of treason. Certainly until the last moment they apparently felt no substantial dissatisfaction toward the Stalinist regime, because the military had been enjoying relatively privileged status during the second revolution of forced industrialization.

However, after the accomplishment of the first five years plan, Stalin still found himself faced with the bitter realities as shown in the industrial output short of the target, many symptoms of indiscipline among the party members and so on. Under these circumstances the *chistka* (purge) begun with the inspection of party documents soon developed into extreme measures including physical liquidation of the old guards. The more often Stalin resorted to terror, the wider the extent of victims enlarged. He could no longer tolerate any independent social or professional group. As the Soviet high command had a more or less peculiar personal bondage, they were not immune from Stalin's suspicion. At last Stalin embarked upon a preventive assault against the potential rivals with so strong a military power. Needless to say, this assault was matched by the breeding of new military leaders totally dependent upon him.

Thus, the author asserts that the main cause of the Tukhachevsky affair should be sought in the internal rather than external circumstances of the Soviet Union. At the same time, this paper is an attempt to interpret Stalin's activities in terms not of *psychopathology* but of *rationalism*.